

ラウラ・スタザネ パブリックトーク

「ラトビアの首都、リガのインディペンデントの舞台芸術シーンについて語る」

開催日時:2017年10月10日(火) 19:00-20:30

開催場所:東京芸術劇場 アトリエイースト

こんにちは。ラウラ・スタザネと申します。私はNew Theatre Institute of Latviaで働いており、ラトビアの首都、リガを拠点に演劇のプロデューサー、キュレーターとして活動しています。New Theatre Institute of Latviaの主なスタッフは3名で、ラトビアの一番大きな演劇祭である「ホモ・ノヴオス(Homo Novus)」を、小さなオフィスで企画・運営しています。また、ラトビアの演劇やカンパニーを海外に紹介する「ラトビアン・ショーケース(Latvian Showcase)」というイベントも企画・運営するなど、他にも様々なプロジェクトを手がけています。EUでは、EU圏内の都市が国を超えてコラボレーションすることを促す「クリエイティブ・ヨーロッパ(Creative Europe)」という助成金があるので、ラトビア国内だけではなくヨーロッパの他の地域ともコラボレーションをして創作を行っています。こういった助成金制度を活用して企画したプロジェクトの例として、アートと環境の変化を結び付けるもの、新進気鋭のダンサーを紹介するもの、アーティストと都市空間を繋げていくものなどがあります。

本日はこのようなプロジェクトについて詳しくお話しますが、まずは私がどのような場所から来たのかご紹介します。

ラトビアの首都、リガでの活動

これらは私が住んでいるリガという町の写真で、リガで創作した演劇作品のパフォーマンスを行っている場面です。こういった野外や街中で行う演劇に参加することで、観客は無意識にその作品を通じてラトビアの町を見つめることになっていきます。ここでご紹介しているのは、ドイツのカンパニーのリミニ・プロトコル(Rimini Protokoll)、ラトビア出身の演出家であるカテ・クロレ(Kate Krolle)、クリステ・ブラーネ(Krista Burane)、それからカナダのカンパニーのママリアン・ダイビング・リフレックス(Mammalian Diving Reflex)、そしてフランスのアーティストであるフィリップ・ケーヌ(Philip Quesne)の作品など、ラトビア国内外から招いたアーティストの作品です。

なぜこのような公共の場所で演劇を創作しているかという問いについて、まず最も現実的な問題として、我々は劇場のような決まった場所を持っていないため、何かやりたいと思ったら街へ出る必要があります。ただ、それはもちろん私たちが意思を持って行っていることでもあり、アーティストとどのように町を探求して新しい発見をしていくか、ということの興味でもあります。こういったプロジェクトを進めていくと、町が存在している現実的な場所と、そこにアーティストが想像力を働かせて作り上げた「イメージの空間」が融合する機会に恵まれます。そういった場所を私たちは「第三の場所」と捉えていて、現実的な空間がアーティストの創造性やイマジネーションに出会って「第三の場所」が作られると、そこには演目が終わり、作品がそこになくなっ

た後も、その町を理解する新しい視点や新しい捉え方が残ってくれるのではないかと期待しています。私がアートというものに関わっている主な理由は、このように人と場所が上手く相互で機能した時に立ち現れる空間、そういったものにとっても可能性を感じているからです。

ラトビアの舞台芸術の状況

私たちが企画している「ホモ・ノヴォス」という国際演劇祭が、こういった公共空間の可能性を広げるために一役買ってくれています。「ホモ・ノヴォス」は例年9月初めに約一週間に渡って開催しています。主な取り組みはラトビア国外から招聘した国際的な演劇プログラムの紹介、地元のアーティストを対象に新作を作る機会の提供、サマースクールやトークなどの教育プログラム、もしくはナイトクラブといった少し変わったプログラムも行っています。

ラトビアにある劇場はほとんどがレパートリー演劇を上演する劇場なので、私たちの取り組みは、ラトビアが現在の演劇の状況に向き合うことにもなると感じています。ラトビア国内には、専属の劇団や芸術監督がいて、いつも安定はしているが、保守的であり新しいことに挑戦する機会がない劇場が数多くあります。こういったレパートリーシアターというものは劇団を抱えているので、人気のある作品はシーズンを超えて、もしくは何年も上演することができます。実際、同一の演目を10年以上、上演した例もあります。このようなレパートリーシアターは、ラトビアがソビエト連邦の占領下だった時代(第2次世界大戦後から1991年頃まで)にソビエト連邦の方針で作られたものがほとんどです。ソビエト連邦の方針はとてども保守的で新しい変化を好まないもので、彼らにとってレパートリーシアターで同じ演目をコントロール下において上演することは、とてども都合が良かったのです。しかし、同時にソビエト連邦占領下のラトビアでは、劇場がとてども重要な役割を果たしていました。なぜかというと、劇場には人々が集まることができ、様々な集まり方を考えることができたからです。当時のラトビアの人々は劇場に集まって演劇を観ることによって、自由や解放を得ることができました。上演される演目の内容はソビエト連邦による検閲があり、表面的にはラディカルなことを言えないのですが、その中にラトビアの人々は「行間を読めば分かる」というような意味を隠して上演し、観客も暗黙の了解でその隠れた意味が理解できる、というような密かな楽しみをしていました。そういった意味において、ラトビアの人々にとって劇場は日常から逃れるとてども特別な空間だったので、今でも劇場はとてども大切な場所だと思われています。しかし、1990年代以降、ラトビアの国自体が大きな変化を迎えて、人々や文化のあり方が大きく変化し、劇場に期待される役割も変化してきました。

この期待に応えることこそ、私たちが今目指していることだと考えています。つまり、ラトビアというものの可能性や、これからどのように変化していけるのか、どのような多様性を生んでいけるのかを人々に見せていくことです。

国際演劇祭「ホモ・ノヴォス」

この演劇祭を始めたのは1995年で、今お話ししたような必然性のもとに始まったと感じています。それまでラトビアには国際演劇祭というものがなく、国際演劇祭が誕生した最初の目的

は、我々の隣国であるフィンランドやエストニアで演劇をやっている人々を招いて演劇を紹介していくものでした。今は社会の国際化に伴い規模は大きくなっていますが、最初感じていた必然性、つまり、ラトビアに国際的な演劇を考える場所を作ろうというビジョンは変わっていないつもりです。そういった理由から、地元の劇団に制作を依頼する時には、旧作ではなく必ず新作を作るようお願いしています。「ホモ・ノヴォス」はラトビアのアーティストや演出家、関わる人々にとっても非常にチャレンジングな場所になっていて、彼らが慣れ親しんでいる劇場の外に出て、国際的な文脈で新しい作品を作ることに挑戦してもらっています。

新しい挑戦とは「ブラックボックス」という劇場空間を出て、劇場や演劇を見せるための場所ではないところで演目を考えることです。例えば、工場や廃墟にアーティストが入っていき創作を行っています。今お見せしているパンフレットは直近の第13回目の演劇祭のもので、上演した約20作品の中で「劇場」と呼ばれる場所でパフォーマンスをしたのはわずか3、4作品だと思います。これは私たちの演劇祭の一つの特徴になっており、観客は自身が普段行かないような場所に演劇を観るために連れていかれることとなります。そういった場所でパフォーマンスをすると面白いのは、地元の人々も行ったことのない場所や、自分にとって新しい場所に地元の人々が行く機会を与えることです。アーティストが見つめてくる場所は、普段は閉まっている場所やとてもプライベートな空間で、演目を観に来てくれる観客の中には、演目を観に来たというよりも、演目を上演する場所が見たくて来たのではないかという人もいます。例えば、過去に自分が子供の頃には開いていたビルにもう一度入ってみたいとか、そういった自分の記憶と重ね合わせて演目を観に来る観客もいて、自分の抱えている個人的な記憶とアートが結びつく場になると考えています。

最近の演劇祭から一つ、ラトビアのアーティストであるボルデマーズ・ヨハンソン (Voldemārs Johansons) の『サースト (THIRST) 』という作品をご紹介します。彼はマルチメディアアーティストとして活動し、視覚的効果と音を使った作品を多く作っています。この作品は、嵐の中の大西洋で波が荒立っている様子を間近で撮影したものをギャラリースペースの中に投影しています。普通嵐に揺れる海の近くに寄る体験はあまりできませんが、このスペースの中だからこそ実現する視覚空間が出来上がりました。嵐の音がとても大きく耳へ届くように演出されており、湿気を感じるくらい水分がコントロールされていたので、本当に海の近くにいるような感覚が得られるように作られていました。この作品が上映されたのは廃墟になった古い工場で、他に観客がいない時に一人でこの作品に向き合うと、本当に怖いような、何とも言えないような体験をすることができます。この作品は大きな成功を納め、他の国際芸術祭からも招聘され、ラトビア国内で毎年開催されているビジュアルアートの展覧会でも賞を受賞しました。

コンテンポラリーダンスのプロジェクト

ここまでは演劇に近い分野のお話をしてきましたが、私は主にダンスを専門として扱っていて、コンテンポラリーダンスや、中でも新進気鋭の若いダンサーを紹介する活動を行っています。

ラトビアにおいて、演劇とダンスではかなり事情が異なっています。ラトビア国内では、ダンスはこういった演劇祭や芸術祭において関連プログラムやメインではないアートでおまけのように紹介されることが多いです。ただしこれはコンテンポラリーダンスに限った話で、バレエは昔から嗜まれています。コンテンポラリーダンスになると途端にこのような扱いを受けてしまいます。2000年以降にはダンスの教育を行う機関が現れて、ラトビアのアカデミー・オブ・カルチャー (Latvian Academy of Culture) という学校ではダンスで学士や修士を取ることができるようになりました。こういった教育機関を卒業・修了してもダンサーとしてはインディペンデントに活動していくしかないのが現状で、パフォーミングアーツの領域の中で、ダンスは政府からの助成金を貰うことが最も少ない分野になっています。

そういった流れの中で、ダンスには会場がないことも度々問題視されています。ヨーロッパの他の都市にはダンスのための会場がありますが、ラトビアにもそういう施設が必要だという議論が起こっています。私はある時、このような議論があまりにも多々起こることに少し疲弊し、『ダンス・ムーブ・シティ(Dance Moves Cities)』というダンスが町を動かすプロジェクトを企画しました。このプロジェクトの理念とは、「ダンスに感じられる限界や弱点を我々の魅力に変える」というものです。ラトビアには経済危機の後に空っぽになってしまったビルや公共空間のようなものが無数に見かけられるようになったので、都市空間の中にあるスペースを自ら見つけ出し、そこでダンスを創作していくことにどのような可能性があるのか、どういった新しい方法があるのかを探っていくものでした。このプロジェクトでは、海外から招いた様々な振付家が地元のダンサーと一緒にコラボレーションして、3週間で新しい作品を制作しました。ラトビアはヨーロッパでありながらヨーロッパの中心から非常に離れているという感覚があるので、国際交流をしようにも簡単には生まれにくいように感じます。ですので、ヨーロッパの中心で起こっているような活発な交流をラトビアにも起こすために、国際的に活躍する振付家やダンサーを招いて、ある一定期間ラトビアに滞在してもらうことでこういった交流を生み出そうとしています。

このプロジェクトをやっている時に、ポーランドのクラクフとイタリアのテルニという町でも、同じようにダンスにおける限界や弱点についてアプローチをする試みがありました。このポーランドとイタリアの町と提携し、私たちが招いた国際的な振付家にそちらに行ってもらって新しい創作をってもらうプロジェクトを行いました。一方地元のダンサーには地元に残ってもらい、その地域のエキスパートとして国際的なアーティストとコラボレーションをしてもらっていました。私はこのプロダクションの中で、外から来るアーティストと地元のアーティストの関係性をとても大事に考えていて、その関係性の質を担保することを一番に考えています。つまり、外から来るアーティストというのは、例えばその町に来た時に外からの視点というものを提供することになると思いますが、その外からの視点に、地元のアーティストが地元の人でしか分からない視点を提供するというとても重要な役割を果たして対等な関係を結ぶことによって、両者の関係性が保たれると考えています。

このプロジェクトでは3人のアーティストを招聘して、その3名がそれぞれ全く違うやり方で、全く違う地域で、全く違う関わり方をしてくれました。今お見せしているイメージは、ベルギーのアーティストであるクーン・オーグスタイネン(Koen Augustijnen)の作品です。オーグスタイネンは7人のリガのダンサーとコラボレーションして作品を作ったのですが、このパフォーマンスが行われた場所はリガの中心地から外れた場所で、この場所とリガ中心部は橋一本でしか繋がっていないという地域です。この作品では駐車場を使ってパフォーマンスを行っていて、この周りには高いビルが立ち並んでいます。駐車場の真ん中にテーブルと食べ物を用意して地域の方々が食事に来られるような場所にしましたが、このような活動が地域の人々にとってどのような意味を持つのかということを目の当たりにして、とても驚かされました。というのも、私たちがここに介入するのを邪魔だと思わずに、彼らにとって尊敬すべきゲストだ、というように地域の方がもてなすような振る舞いを見せてくれました。この駐車場は周囲の住宅地に住む人が使うプライベートなもので、ここにいる人だけでなく、この周りの家やあらゆる窓から何が起きているのか見下ろしている人もいて、360度見守られながらパフォーマンスをするという状態になりました。こういった地域に住む人々はほとんどが普段劇場に演劇を観に行く習慣を持たない方なので、劇場でこういった演目をやろうとしていたら足を運ばなかったであろう人々がパフォーマンスを見てくれ、そして、そこで新しい非日常の場が生まれその空間を楽しむ、という状況が生まれたことを嬉しく思いました。

これは、日本のカンパニーであるコンタクト・ゴンゾ(contact Gonzo)との作品です。彼らも3週間リガに滞在して、7人のダンサーと一緒に作品を作りました。彼らが作品を制作した地域は壊れかけの家が並ぶような住宅地で、その中でこの住宅地に住んでいる人とコンタクト・ゴンゾのメンバーが出会い、そこから家の中を通して外にある庭のようなスペースを発見して、ここでパフォーマンスを行いました。そして彼ら自身で客席を設置して住宅地の中でこのようなパフォーマンスをしていると、その地域に住んでいる人々が偶然通りかかって、近所の人が見ているのでその人たちも参加して見るというような状態が生まれ、このような作品に仕上がりました。コンタクト・ゴンゾがパフォーマンスをしている場所は通常立ち入り禁止の場所だったので、説得してこのように上演できるようにしたのですが、その立ち入り禁止の場所にみんなで入ってそこで何かが起こる、という特別な感覚を、パフォーマンスを見ていた人全員が共有していたと思います。

これが3番目の作品で、オーストリアのアーティストであるウィリー・ドーネー(Willi Dorner)の作品です。彼の作品におけるテーマは「都市空間における身体」で、普段は人間がいないような場所にあえて人間の身体を置くことによって、ある空間を生み出します。彼らが演目を上演した地域もある種特別な場所で、とても貧しいエリアなので治安が悪く、大きな精神病院もあり独特の雰囲気を出しているような場所でした。そして、この地域は初めて地元の方々に歓迎されなかった場所になりました。このように野外や道端でパフォーマンスをしていると、この地域の方々は街中でダンスやパフォーマンスが行われることに慣れておらず、これは何か違法行為を行っているのではないかと心配になって警察を呼んでしまいました。ただ、そういった

町の人々の行動もこのような公共スペースは一体誰のものなのか、誰が許可を与えて、誰に帰属するものなのかを考えさせてくれる興味深い問いかけになります。このように街中や道端で行っているパフォーマンスに対してはとても懐疑的な視点を投げかけていた地域でしたが、同時にこのアーティストは、同じ地域内で個人宅の中に写真を展示するというプロジェクトも行い、そちらはとても興味深い結果をもたらしました。個人宅の中に事前に入っていって、その中でダンサーたちがパフォーマンスを行ったり、身体を露わにする行為を撮影したものを写真として展示しています。そして、例えばこのイメージのように事前にダンサーたちが実際に個人宅の中にある棚に身を縮めて、衣装箆笥の中に4人重なっている状態を作って撮影し、それを展示したものを後で観客が見に来るといった展示です。この写真展なるものを見に来る人々は、事前に地図を受け取ってそれを頼りに個人宅を回り、実際にベルを鳴らしてそのお宅にお邪魔してこの写真を見るということが必要になります。最初は、このようなとても奇抜で新しい提案をこういった地域の方が快く受け入れてくれると思わなかったのですが、とても驚きました。そこから気づかされたのは、こういった地域でも、このように提案すればオープンに自分のプライベートなスペースをさらけ出し、アーティストの取り組みに快く協力してくれる人がいるので、状況から自分の偏見だけで判断せず、観客は自分が想像するよりもあらゆる可能性を秘めていることを常に心に留めておくべきだと思いました。

欧州文化首都でのダンス・プロジェクト

では次に、他のプロジェクトをご紹介します。これは自分で立ち上げた企画の中でも特に気に入っているもので、リガが欧州文化首都に指定された2014年に行ったプロジェクトであり、様々な職業を持つ人の仕草や身体の動きに着目した作品を作りました。この作品に参加してくれたダンサーはプロフェッショナルのダンサーではなく、彼らは各々が別の職業を持っています。彼らの共通点は、それぞれの職業の中において、その職業のために必要である特別な動作を毎日繰り返しているような人々であることです。彼らはいつも仕事を進めるために最も効果的で、最も無駄のない動きを繰り返しているだけですが、そういった無駄のない動作の中にあるポエティックな面に着目して、日常からその動きを取り出してくるという試みをしました。この企画には10人の振付家をリガから招き、それぞれにリガの様々な場所で人々が仕事をする動作に着目した5分から8分の短い演目を考えてもらい、美容室やCDショップ、本屋といった街中にあるスペースでパフォーマンスを行いました。

この中で、イタリアのビジリオ・シエニ(Virgilio Sieni)という作家と一緒に作りました。彼はフィレンツェのアーティストで、2007年からはジェスチャーに関するアカデミーを主催しています。そこでは仕草というものをどう捉えるかということの研究しており、特に地中海の周りの人々の仕草に着目して、歴史的な系譜と日常に溢れる仕草を如何に融合していけるかということに取り組んでいます。彼のアカデミーで教鞭をとっている方もお招きして一緒に創作をして、最終的に観客はツアーのような形で振付家が選んだお店などの様々な場所を回りながら、5分程度のパフォーマンスを鑑賞していく、というものが出来上がりました。それぞれの場所で、ある時間

になると5分くらいのジェスチャーを基にしたダンスというものが行われ、パフォーマンスが終わるとそこで働いている人々は働く現場に戻るといったことが淡々で行われる演出でした。これは公共の場でパフォーマンスをしたので、企画を知らずに偶然目にする人々もたくさんいて、彼らの反応はとても興味深いものでした。こちらは、私が気に入っている作品の一つです。自転車で荷物を運んでくれるバイカーが参加してくれて、彼らが一斉にあるタイミングで事故に遭って死ぬ、という彼らの仕事にとって最も危機的状況に当たる行動を一斉にするパフォーマンスがあり、これを目にした人々は一瞬驚いて、助けなきゃいけないかしら、というような感じで注目してくれるのですが、同時にこれは何かパフォーマンスなのだろう、と気付いていました。

ここで行われている試みは、我々の変わらぬ日常をどのような視点から捉えているかということに対して新しい視点を提案していくと同時に、この地域に住む人々も自分の町を発見していくような瞬間になったと思います。それは自分が親しみのある場所かもしれないし、自分のイメージーションが掻き立てられるような場所であるかもしれません。

以上です、ありがとうございました。

(以下、質疑応答略)